

バトン

「パス・ザ・バトン」

5年 K・Sくん

圭は絵を書くことが好きな、心優しい少年です。なので、死んでしまったおばあちゃんのむすめの力オルのひな人形を、みんなでもらってきてくれて、おばあちゃんはとてもうれしかったと思います。

ぼくがこの話の中で一番印象に残ったのはハッサンがイランに帰っている間に、クラスメートの鈴木くんがハッサンの席にすわっていたことです。仲は良かったはずなのに、なぜこういうことをしたのかわからなかったので、不思議に思いました。気づかぬ間に自分が人をきずつけてしまうこともあるので、本当に鈴木くんがいじめようとしてやったとはかぎりません。ぼくも、それをやってしまったことがあります。つい相手の口車に乗り、友達の間口を言ってしまういました。ただ、ぼくは、その話のふんいきに合わせてたつもりだったけれど、それを聞いていた母に強く非難され、自分に対してショックを受けたことを覚えています。なので、鈴木くんもちよっとしたじょうだんのつもりで言っただけかもしれないし、周りの人もその空気に合わせただけかもしれないけれど、それでもやっぱり、読んでいてとてもいやな気分になったので、ぼくはこれからやらないように気をつけようと思います。

この話には、二つの大事な力ギがあると思います。一つ目は、「タイサンボク」です。タイサンボクのおかげで白井さんと圭は仲良くなり、最後には、三人の共通した特別になったからです。また、柳さんと圭が仲良くなったのは、柳さんが造園の仕事をしていることを知り、タイサンボクのことを聞いたからでした。

二つ目は「ひな人形」です。病気で亡くなったむすめの力オルさんのためにおばあちゃんが手作りした宝物であるけれど、ハッサンのお母さんは人形を好きではなく、それは戦争で死んだ人に似ているからだと言っていました。戦争はただだつて子供のころからいけないことだとわかっているはずなのに、なぜ大人になると戦争を始めてしまうのかわかりません。そして、おばあちゃんからももらった力オルのひな人形のおかげで白井さんは、つめたいと思っていたおばさんと心を通わせることができ、ぼくもうれしくなりました。

「リレーのバトンといっしょや。しかもそのリレーはエンドレスかもしれない。だれもがつぎつぎに、パス・ザ・バトンでとこやな。」という柳さんの言葉の意味は、三人が力オルの大事なひな人形をもらうことで、人形は新しい持ち主のところで生き続けられる、つまり人形を通じて、人がつながり続けることができるということに気づきました。

柳さんからももらった桐のきりかぶの一部で圭は何を作り、またそれが人と人をつなげる何かになったらいいなと思います。